
3.11に学ぶ 遺族の立場から

(相澤 純、LiSA 19: 210-213, 1912)

2012年10月26日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

筆者は岩手医科大学医学部麻酔科の医師であり、東日本大震災が起こった時は脳腫瘍患者の手術に入り、麻酔を担当していた。

部屋が大きく揺れ始め、筆者が麻酔器等を確認した直後、部屋の電気が切れ非常用電源が立ち上がった。麻酔器はバッテリーが搭載されたものであり問題は無かったが、マルチパラメータモニターは電源が切れ再起動となり患者のバイタルが分からない状態になった。

入室前の手術は全て中止、現在進行形の手術はなるべく早く終わるよう術者に協力してもらい、という方針が決定し、筆者の担当していた手術も閉頭にかかった。覚醒・抜管後、全身状態の安定を確認したが、エレベーターが使えない為、担架でICUへと搬送した。

その後、筆者は医局に帰り電話で自宅の無事を確認したが、陸前高田市の母親の安否は分からず、全ての手術が終了した20時頃、一人暮らしの医師以外は帰宅することとなった。

当初は病院に多くの患者が搬送されてくるのが危惧されたが、実際には、手術可能な患者は多くなく、筆者は職務を離れ母親の安否確認を行っていた。道路やガソリンの問題を考え、また警察や消防、自衛隊の救出活動の妨げとなることを恐れ、直接現地へは向かわず盛岡市で警察署に行方不明者の登録をすることから始めた。しかし陸前高田市を含む多くの市町村で、被害状況を取りまとめる役場自体が壊滅的な被害を受け機能停止していた。指定の避難所にも被害を受けた場所が多く、被災者たちが被害を免れた個人宅や集会所に避難しており、どこに誰がいるのかという情報はほとんど無かった。そのような状況の中、地元テレビ局や新聞社が活躍し、避難者名簿を作ったりと最大の情報源となっていた。一方、岩手県警からも死亡確認者名簿が発表されていたが、母親の安否は不明のままであった。

地震の約1週間後、筆者は車で陸前高田市へと向かった。1週間が経過し、大分片付いた状態であったにも関わらず、その悲惨さは目を覆うばかりだった。歩いて、実家があった場所へと辿り着いたが、ぼろぼろになった建物や流れてきた大木を見て、もしここに人がいたら絶対生き残ってはいないだろう、と筆者は感じた。市の防災対策本部へ向かったが、県警で登録した行方不明者情報が全く伝わっておらず、改めてそこで登録をし直した。その頃には生存者の名前ももう出尽くしていたので、筆者は遺体安置所を回り始めた。1体1体ご遺体の確認を繰り返し、4月1日ようやく母親の遺体が見つかった。身元の分かるようなものは何もなく、生前の写真を手に見比べないと本人だと確信は持てない状態だった。そして、遺体との対面すら叶わない方が多くいる為、おかしな話ではあるが現地では遺体が発見されると「良かったね」と言い合うような状況であった。

筆者は3月12日に実家を訪れる予定であった。震災が1日ずれて発生していたら母親と共に津波に飲み込まれていたに違いない。実家は海岸からかなり離れており、もし津波が来ても2階に逃げれば大丈夫だろうと考えていたし、同じように考えている人も多いと思う。今回の震災を1つのフルスケールシミュレーションとし、同じことが違う地域で起きた時に被害を最小限にすることが出来れば、犠牲になった命も無駄ではなかったということになる。その為にも、全国で病院も含めた地域全体の防災対策をより一層充実させていくべきだ。